



下村健一の「手づくり動画」ウォッチ

「長男誕生を機会に、8ミリカメラ購入」という、淡々とした妻によるナレーション。画面の赤ちゃんは、昔懐かしい輪郭のフワッとぼやけた白黒映像。ああ、日本中の家庭に一体どれほどたくさん、こういう動画が眠っているんだろう！

サラリーマンの佐藤六郎さんは、ここからビデオマニアの道にはまっていっていった。週末ごとに素人ドラマの「役者」として駆り出される幼い姉弟の演技には、そこはかたなく義務感が漂っていて、面白い。

現像された8ミリフィルムが店から届くと、妻は人目を気にしながら、団地のベランダに合図の旗を出す＝写真。勤め帰りの夫に、「一刻も早く知らせろ」と頼まれているからだ。

夕立も、雲間の陽光も、みな細かく命じられて妻が撮ったもの。画面のド真ん中に、不満げな字幕が表れる。「私はすっかり便利屋です」……。そして、また淡々と妻の語り。「私は、映像が大嫌いになっていきました」

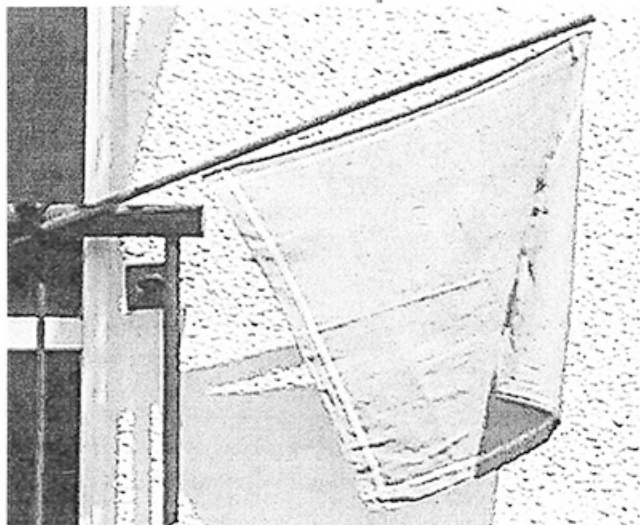
機材が8ミリからビデオに変わり、定年を過ぎてなお手作り動画に熱を上げる夫。そんな佐藤家に訪れた転機は、六郎さんのがん宣告だった。

元TBS局アナ兼取材記者。報道番組などに出演するかたわら、一般市民の映像制作を支えるアドバイザー歴14年。現在、慶応大学特別招聘教授（マスコミュニケーション）

お父さんの映像個人史

余命3カ月。人生最後の作品になるとも知らず、コンテストに出品する作品の制作に没頭する夫の姿に、妻は長年の映像嫌いから一転、ひたすら受賞を祈る。そして、審査結果発表――。

それから18年の歳月が過ぎた、去年。「東京ビデオフェスティバル」で



優秀作品賞を受賞したのは、六郎さんの残した映像を、妻・好子さんが自らつなぎ合わせて完成させた、8分の小品「おくりもの」だった。ラストシーンで、好子さんはこう独白する。「私は今、映像大好き人間です。ビデオは、夫からの最高の贈り物でした」



全国のこうした「映像大好き人間、たちの手作りの名作を、これからこの欄でご紹介してまいります。